

# 鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴

著者	竹田 晃子
雑誌名	喜界島方言調査報告書 : 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
ページ	139-162
発行年	2011-08-15
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ; 11-01
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002433">http://doi.org/10.15084/00002433</a>

# 鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴

竹田 晃子

## 1 はじめに

本稿は、鹿児島県大島郡喜界町方言のオノマトペの特徴を把握することを目的とする。具体的には、方言文献資料によるオノマトペ・リストを作成しつつ語彙的な特徴を概観したのち、喜界町城久（ぐすく）における面接調査によって実際の使用状況を把握する。

方言におけるオノマトペ研究は、共通語のオノマトペ研究が大規模なデータベースに基づいて多角的に行われている現状とは異なり、語形のリストすら存在しない。本稿は、方言文献資料に基づいて喜界町方言のオノマトペ・リストを作成し、それらを参照しながら実際の調査を行うことにより、方言におけるオノマトペの研究方法を模索するという側面を持つ。

## 2 方言文献資料からみた喜界町方言のオノマトペ

### 2. 1 喜界町方言オノマトペ・リスト

最初に、方言文献資料から喜界町方言のオノマトペを抽出した「喜界町方言オノマトペ・リスト」を作成し、語形と意味、語形数から全体像を概観する。

文献資料として利用したのは次の3種類である<sup>1</sup>。

- [1] 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論社（国書刊行会，1977年復刻）  
喜界町阿伝出身・1904(明治 37)年生まれの筆者による方言集。阿伝の方言を中心に採集。
- [2] 中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言 4—奄美喜界島志戸桶一』，法政大学沖縄文化研究所  
喜界町志戸桶の高年層を対象に行われた方言調査報告のうち、語彙分野の報告。
- [3] 森 豊良(1979)『喜界島の方言集』（自費出版）  
喜界町中間出身・1905(明治 38)年生まれの筆者による方言集。採集地点については特に明記されていない。

上記の資料から抜き出したオノマトペはのべ149語となった。末尾の付表「喜界町方言

<sup>1</sup> この他、次の2点も参照したが、共通語形で記述されていたため利用しなかった。

・岩倉市郎 採取(1943)『喜界島昔話集』三省堂

・田畑英勝 編(1974)『奄美諸島の昔話（日本の昔話 7）』日本放送出版協会

のオノマトペ・リスト」およびその凡例を参照されたい。当該方言の語彙においてオノマトペが占める割合は、上記資料における全語形のべ語数が1万語を超えることからみて、とりわけ多いものではない。方言集としては〔1〕に比べて〔3〕が倍以上の数となったが、これは他地域の方言集・方言辞典と同傾向で、近年になるほど方言におけるオノマトペが語形として意識されやすくなったことの反映であると考えられる。

このリストをもとに、以下、語形と意味について述べる。

## 2. 2 語形の種類

喜界町方言オノマトペ・リストにおける語形<sup>2</sup>の種類は、主に次の3種類である。

### ①繰り返し語形（語末の長音が繰り返しに対応しない語形も含む）

アドゥナアドゥナ、ウチャウチャ、ツウニャツウニャ、ガジガジ、ガタガタ、ガヂガヂ、カミヤカミヤ、ガラガラ、キーキー、グーグ、グジュグジュ、クスクス、グヂュグヂュ、グツグツ、グラグラ、クリクリ、ゲーゲ、ケーケー、ゲーゲー、コーコー、ゴンゴン、サーサ、ザーザ、ザーザー、サッサ、サラサラ、ジルジル、ジワジワ、スッサギスッサギ、ズラズラ、セカセカ、ソーソ、ソヨソヨ、ターリターリ、タチョタチョ、ヂヂ、ヂルヂル、チンチン、ツッチャツッチャ、ツルツル、ツンツン、ディーディー、テヤテヤ、ドウムドウム、トゥルトウル、ドウルドウル、ドキドキ、ドンドン、ナドナド、ナンブナンブ、ニューニュー、ネイーネイー、バタバタ、パチパチ、ハッチラハッチラ、ハラハラ、ピーピー、ヒーラヒーラ、ヒーリヒーリ、ビラビラ、ブーブー、ブカブカ、フトゥフトゥ、フトフト、フヤフヤ、ブラブラ、ブルブル、マードゥイマードゥイ、マーマー、マチャマチャ、マヤマヤ、マンチャマンチャ、ムシヤムシヤ、ムジャムジャ、ムチャーリムチャーリ、ムチャムチャ、ムドムド、ムニャムニャ、ユデーユデー、ユフユフ、ユラユラ、ヨイヨイ、ヨーリヨーリ、ヨイヨーイ、ヨーガリヨーガリ、エーエ

### ②イ・リ・ラ等が付く語形

・イ：アッサイ、エーイ、ガッツイ、ガットゥイ、グルイ、グンナイ、サッパイ、シツカイ、シッター、スッター、スッパイ、ズップイ、チツカイメツカイ、ツマイ、ドゥップイ、ゾップイ、トゥムイ、ニューウイ、ニューワイ、ビッター、ユラリュイ、ユルイ、ヨーイ、ヨイヨイ、マードゥイマードゥイ、ヨイヨーイ

・リ：サリッ、ツゾーリ、ヨーリ、サンジャリ、クリクリ、ターリターリ、ヒーリヒ

<sup>2</sup> 無気音・鼻音・アクセントの表記は省略した。原典を参照されたい。

ーリ, ムチャーリムチャーリ, ヨーリヨーリ, ヨーガリヨーガリ

- ・ラ: バラ, パラー, ビラー, ブラ, ガラガラ, グラグラ, ブラズラ, ハッチラハッチラ, ハラハラ, バンバラー, ヒーラヒーラ, ビラビラ, ブラブラ, ユラッサラ, ユラユラ

### ③ ト／トゥ (副詞の接辞) が付く語形

アッサイ ト, グルイ ト, サッパイ ト, シッカイ ト, ユルイ ト, ウガッ ト, クッ ト, ヤッ ト, ブン トゥ, ツン ト, パシ トゥ, スハッ ト, サーザー ト, ディーディー トゥ, ネイーネイー ト, マーマー トゥ

上記から、喜界町における方言オノマトペの語形は本土方言と同様、繰り返し語形が多い点で本土方言と同様であることがわかる。また、名詞「ドウル (泥)」の繰り返し語形「ドウルドウル (泥などの形状。どろどろ)」, 動詞「ウチャ (浮き)」の繰り返し語形「ウチャウチャ (落ち着きのないこと。うきうき) など、名詞や動詞と関係がある語形もある。

本土方言と異なる点として、語末音にリ・ラよりもイが多いことがあげられる。イはラ行子音が脱落したものと考えられる。また、イが付いた語形は繰り返し語形が少ないのに対して、ラが付く語形はほとんどが繰り返し語形である。

また、本土方言と比べると動詞の構成要素としての生産性はあまり高くない。動詞「する」相当の語形が付く「ツルツル シ」「ドキドキ シ」などの語形はあるが、他方言や共通語にみられる「キラメク」「ザワメク」, 「ネバツク」「ムカツク」などのような動詞接辞メクやツクが付いた語は確認できない。一方で、オノマトペ+「人」のような形、たとえば「ブラムン (することがなくぶらつく人=することがなく遊びくらす人)」「クスチャー (のどがごろごろしている人=喘息の人)」など、名詞と結びつく形は散見される。

## 2. 3 意味の分類

喜界町方言オノマトペ・リストを意味によって次の7種類に分類した。語数は括弧内に示した (詳細は表1を参照)<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> ただし、今回の分類は、方言オノマトペについて一般に行うべき分類というより、喜界町方言オノマトペ・リストをみわたし、意味で全体を大きく分けようとする7種類になるというようなものである。したがって、日本語方言あるいは日本語方言全体における喜界町方言について、オノマトペの特徴を把握するためには、他地域との比較を視野に入れた分類が必要になる。また、これらの分類のうち、④速度・⑤心理・⑥量・⑦抽象的意味は副詞に分類されることが多いと思われる。ここでは詳細な意味区別のために分けたが、この分類については再考の余地がある。

- ①音……動物の鳴き声や実際の物音を表す語（擬音語・擬声語）（36語）
- ②動き…物や人の動くようすを表す語（39語）
- ③身体感覚…身体の調子や腹具合・睡眠状態，触り心地などを表す語（18語）
- ④速度…動きの速度を表す語（18語）
- ⑤心理…人の気持ちを表す語（10語）
- ⑥量……事物の量を表す語（21語）
- ⑦抽象的意味…上記に当てはまらない抽象的な意味を表す語（例：ちょうど・たくさん・しっかり・あたたかも・もう，など）。（25語）

語数は，①音・②動き，次いで⑦抽象的意味・⑥量に分類されたのべ語数が多いが，特にどの意味が多いということはない。また，一つの語が複数の意味を持つということも，一つの意味を複数の語形が表すということもなく，このリストにおいては一つの語が複数の意味を持つということにはなかった。

## 2. 4 語形の種類と意味の分類

語形の種類と意味の分類を組み合わせてのべ語数をまとめると，表1のようになる。

表1 語形の種類ABCと意味の分類①～⑦の関係

		93語	50語	16語
		A 繰り返し語形	B～イ・ラ・リ	C～ト・トゥ
36語	①音	● 24語	△ 7語	— 1語
39語	②動き	● 30語	◎ 12語	— 0語
18語	③身体感覚	● 15語	◎ 8語	— 0語
18語	④速度	● 11語	△ 5語	△ 3語
11語	⑤心理	△ 8語	△ 3語	— 1語
21語	⑥量	— 2語	◎ 8語	△ 3語
25語	⑦抽象的意味	— 3語	△ 7語	◎ 8語

（列の目安として：●多い，◎やや多い，△やや少ない，—ほとんどない・ない）

表1から，喜界町方言のオノマトペは，語形と表される意味との間に関連があることがわかる。A 繰り返し語形は，①音・②動き・③身体感覚・④速度を表すものに多く，⑥量・⑦抽象的意味を表すものには少ない。C ト・トゥを後接する語形は⑦抽象的意味を表すものに多く，①音・②動き・③身体感覚・⑤心理を表すものにはほとんどない。逆のみかたをすると，実質的なものには繰り返し語形が多く，抽象的なものにはト・トゥを後接するものが多いという傾向があるといえる。

### 3 喜界町城久方言におけるオノマトペ

#### 3.1 面接調査の観点

面接調査では、喜界町方言オノマトペ・リストでもっとも語数が多かった部分に注目し、語の使い分けを把握できるよう質問文を用意した。語数が多かったのは、実際の音や声を表す場合、動きのようすを表す場合、それらに比べるとやや抽象的な意味に用いられる場合である。したがって調査では、雨音と動物の鳴き声などを表すオノマトペ、人や動物の動きのようすを表すオノマトペ、速度と量を表す副詞的用法のオノマトペを取り上げることとした。

語彙の研究、特に意味記述においては、通常、いわゆる「閉じられた体系」を仮定し、その体系内での語の使い分けを記述していく。無限に広がる語彙を一定の範囲に囲い込み、その中での意味的な関係を明らかにするということである。今回の調査では、オノマトペ・リストから類似・隣接する意味で使い分けられることが見込まれる複数の語形群を選び出し、琉球方言・本土方言との関連や調査のしやすさにも考慮しながら調査を設計した。

面接調査は、2010(平成22)年9月10日に、城久公民館において城久の生え抜きの高年層・女性2名(1929生、1932生)を対象に、筆者が行った。お二人の回答には大きな違いがみられなかったため、本稿ではまとめてあつかう。また、方言の表記について、文献資料は原文に基づく。面接調査の結果はなるべく発音に近いカタカナ表記を基本とし、オノマトペ部分に音声表記を併記する。

以下、順に調査結果を述べる。

#### 3.2 音を表すオノマトペ

喜界町方言オノマトペ・リストで「音」に分類した語を概観すると、個別の音を表す語が多く、何らかの意味体系をなしていると思われるものは見出しにくい。また、音を表すオノマトペにおいて、大きな音は有標だが、小さな音は無標であると考えられる。ここでは雨音を表すオノマトペをたずねたが、大きな雨音にはオノマトペが用いられるものの、小さな雨音にはオノマトペが回答されなかった。

激しい雨の降る音は(1)のようにザーザー[ɕa:ɕa:]と表現される。(2)(3)のようなオノマトペ以外の表現も回答された。

- (1) ザーザー[ɕa:ɕa:] アメ フットウイヤー。(激しい音で雨が降っている。)
- (2) シンコクアメ フットウイヤー。(激しい雨が降っている。)
- (3) オーアメ フットウイヤー。(大雨が降っている。)

弱い雨が降るようすを表す場合には、次のようなオノマトペ以外の語形が回答された。

- (4) ナマアミ フットウイヤー。(弱い雨が降っている。)

### 3. 3 動物の鳴き声や動物がたてる音を表すオノマトペ

鳴き声を表すオノマトペについては、豚、馬、牛、猫、犬、鶏、雲雀、尾長鶏、鶯の鳴き声について、(5)～(13)のような回答を得た。

(5) 豚：ゴイーゴイー[goi:goi:]

(6) 馬：ヒー[çi:]

(7) 牛：モー[mo:]

(8) 猫：ニャーニャー[nja:nja:]

(9) 犬：ワンワン[wanwan]

(10) 鶏：クークー・クークー[ku:ku:ku:ku:] (鳴き声)

鶏：コケコッコー[kokekokko:] (朝、時を告げる鳴き声。共通語的)

(11) 雲雀：チッチー[tçittçi:]

(12) 尾長鶏：へーへーコイコイコイ[he:he:koikoikoi]

(13) 鶯：ホントニタケタカ[hontonikaketaka] (聞きなしの一種)

蠅については、羽音を表すオノマトペが回答された。

(14) へーガ ブーブー[bu:bu:] スイ。(蠅がブンブンする。＝蠅がブンブン飛ぶ。)

次の(15)は猫がのどを鳴らす音のオノマトペであるが、これは(16)のように猫を呼ぶときの呼びかけでもある。

(15) 猫が：グルグル、グルグル[guruguru.guruguru] (猫が喉を鳴らす音)

(16) 猫に：グルグル、グルグル[guruguru.guruguru] (猫を呼び寄せるとき)

「猫」の名称にはグルー[guru:]を用いる<sup>4</sup>。城久の話者お二人に「猫」をグルー[guru:]と表す理由を尋ねたところ、もともとは猫がのどを鳴らす音をまねたオノマトペに由来するとの回答であった。幼児語としても用いるが、大人語でもあるという。このことから、(15)(16)のオノマトペの短縮形が「猫」を表す名詞になったものと考えられる<sup>5</sup>。喜界島南部に位置する上嘉鉄、中里の生え抜き話者（どちらも男性）からも同様の回答を得た。

喜界町の方言分布については中本正智(1987)に詳しい。南西部にグルー[guru:]が分布するようすとグルー[guru:]の由来について、次のように述べている (p.67。下線は竹田による)<sup>6</sup>。

<sup>4</sup> 面接調査ではグルー[guru:]が自発的に回答され、誘導によってマヤー[maja:]も回答された。

<sup>5</sup> 岩倉(1941)には「グルー：猫。マヤーに同じ。」(p.101)とある。

<sup>6</sup> 中本(1981)(1979)が指摘するように、名詞「猫」を表す[maja:]が猫の鳴き声のオノマトペに由来する語であるかどうか、今回の調査では確認できなかった。今後の課題である。



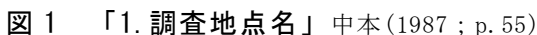
maja: 荒木、手久津久、浦原、  
川嶺、花良治、蒲生、阿伝、  
嘉鈍、白水、早町、塩道、  
佐手久、志戸桶、小野津、  
伊実久、伊砂、長嶺、中熊、  
西目、大朝戸、島中、先内、  
中間、池治

マヤー系は、北部と中部を中心に分布し、グルー系は湾を中心に南部に分布している。

うな語であろうか。これも擬声語で、猫が人なつこくすり寄って来て喉を鳴らすところからきている。同じ擬声語由来の語であっても鳴き声と喉を鳴らすことの両方から来ているのは興味深いことである。

沖縄方言で猫をマヤーというのだが、猫を呼ぶときは独特のしぐさがある。手を差し出し、手の平を上にして指を立て、屈伸させる。手はちょうど欧米人が手まねきをするような動きをする。手の動きに合わせて、クルクルクルと呼ぶのである。そして猫の喉をなでてやると猫は喉をクルクルと鳴らして安心する。この呼び声のクルが喜界島で猫の名称に発達したと考えられる。

また、グルー[guru:]は奄美大島にも分布する。琉球全体の方言分布を図示した中本(1981)は、「グルー系は奄美大島と喜界島にあり、幼児語として使われることもある。グルー系は猫の喉を鳴らす音から出た擬音語である。本来、幼児語として発達したもので、大人でも猫を呼ぶときには使われる。」(p.144)と述べている。



<sup>7</sup> 上嘉鉄について、中本(1987)の地図にはマヤーの記号があるが、本文にはグルーとある。



喜界町方言には、オノマトペの繰り返し語形を短縮化した語形の語末を長音にしたものが名詞として用いられる例が他にもみられる。表2に、繰り返し語形と名詞と対応していると思われるものを岩倉(1941)から抜き出してまとめた。これらの名詞は、「繰り返し語形の意味する状態にある人」というような意味を表すことがわかる。

表2 繰り返し語形の短縮化による名詞形

オノマトペ（意味）	名詞（意味）
アドゥナアドゥナ（のろのろーまごまご。）岩・p.015	<u>アドゥナー</u> （のろま。罵言して言う語。アドゥスイも言う。）岩・p.015
グンナイグンナイ（跛者の歩行の様を形容していう。）岩・p.101	<u>グンナー</u> （跛。）岩・p.101
ヂルヂル（じろじろ。目を動かし、またはぎよろぎよろ凝視する形容。）岩・p.187	<u>ミーヂルー</u> （目のぎよろぎよろしている人。）岩・p.187
ブカブカ（副詞。ふはふはと軽い触感。一ふとんや土など。）岩・p.272	<u>プカー</u> <sup>8</sup> （（阿伝・児）相撲の弱い者。）岩・p.272
ヨーガリヨーガリ（ひよろひよろ よろよろ。人にも物にもいう。）岩・p.326	<u>ヨーガリー</u> （痩せてひよろひよろしている者。）岩・p.326

「猫」のグルー[guru:]も同様に、オノマトペの繰り返し語形を最短の語形に短縮化し、語末を長音にすることで、名詞形「グルグル、グルグル[guruguru.guruguru]とのどを鳴らす動物」というような意味から成立したものと考えられる。猫がのどを鳴らす音のオノマトペとして用いるときはグルを2～4回繰り返すのが一般的だが、名詞「猫」として用いるときは繰り返さず、語末を伸ばしてグルー[guru:]と言う。共通語でも動物の鳴き声のオノマトペ「ワンワン」「チュンチュン」などが「犬」「雀」などの動物名として用いられることがあるが、あくまでも幼児語であり、繰り返し語形を短縮化した「ワン」「チュン」などの名詞形もない。

他の動物についてもこのような対応がないか確認したところ、鶏を呼び寄せるときに「トゥートゥー、トゥートゥー[tu:tu:.tu:tu:]」を用い<sup>9</sup>、「鶏（名詞）」の幼児語としてトゥートゥー[tu:tu:]と言う場合があることがわかった<sup>10</sup>。

(17) 鶏に：トゥートゥー、トゥートゥー[tu:tu:.tu:tu:]（鶏を呼ぶとき）

(18) 子どもに幼児語として：トゥートゥー[tu:tu:]（名詞：鶏）

しかし、トゥートゥー[tu:tu:]はオノマトペには由来しないようである。鶏の鳴き声のオ

<sup>8</sup> 「プカー」は阿伝の幼児語とあるが、「ブカー」の誤植かと思われる。

<sup>9</sup> 岩倉(1941)にも「トゥートゥー：鶏を呼ぶ語。」(p.152)とある。

<sup>10</sup> 岩倉(1941)には、「ニューニュー（幼）：鶏。トゥートゥーに同じ。」(p.208)とあるが、今回の調査では確認されなかった。

ノマトペは「クークー、クークー[ku:ku:.ku:ku:]」で、これは呼び寄せ語としては使われない。また、名詞「鶏」の大人語としてトゥイ[tui]が回答され、オノマトペに由来する名詞「鶏」相当の語形（たとえばトゥーのようなもの）は確認できなかった。

この他の動物については、犬を呼ぶときは名で呼び、牛・馬・豚を呼び寄せることはまずないとのことで、猫・鶏以外の動物を呼び寄せる際のことばは回答されなかった。なお、牛への号令として(18)(19)(20)のような回答があった<sup>11</sup>。家畜に対して呼びかけること自体が号令であるためと考えられる。馬については手綱で命令するとのことで、特に回答されなかった。

(19) 牛に：ッウ[?u]（号令：左に行け）

(20) 牛に：トゥディ[tudi]（号令：右に行け）

(21) 牛に：フイ[ɸui]（号令：前進しろ）」

以上の動物の鳴き声のオノマトペや動物への呼び寄せ語などについて、表3にまとめた。

表3 城久方言における動物の鳴き声などのオノマトペと  
それに由来する呼びかけ語・名詞

語 動物	鳴き声などのオノマトペ	呼び寄せ語	オノマトペ由来の名詞	
			幼児語	大人語
豚	[goi:goi:]	—	—	—
馬	[çi:]	—	—	—
牛	[mo:]	—	—	—
犬	[wanwan]	—（名前で呼ぶ）	—	—
猫	[nja:nja:]（鳴き声）	—	—	—
	[guruguru.guruguru] （のどを鳴らす音）	[guruguru.guruguru]	[guru:]	[guru:]
鶏	[ku:ku:.ku:ku:]	—	—	—
	—	[tu:tu:.tu:tu:]	[tu:tu:]	—
雲雀	[tɕittɕi:]	—	—	—
尾長鶏	[he:he:koikoikoi]	—	—	—
鶯	[hontonikaketaka]	—	—	—
蠅	[bu:bu:]（羽音）	—	—	—

（—は該当する語形が回答されなかったことを意味する）

<sup>11</sup> 岩倉(1941)には「チュディ：左一馬及び牛に命ずる語。」(p.147)，「ウ：右、一馬及び牛に方向を命ずる語。」(p.40)，「フイ：馬に「進め」と命ずる語。」(p.232)とあり、(19)～(21)とほぼ符号する。

これらのことから、喜界町方言においては、動物の鳴き声などのオノマトペは必ずしもそのまま動物を表す名詞になるというわけではなく、特に「猫」において、次のように成立したものと思われる。「猫」がのどを鳴らす音を模したオノマトペがあり、それがペットとして呼び寄せるときの呼び寄せ語となる。同時にそのオノマトペを短縮化し、語末を長音化した語形が幼児語において一般名詞として用いられ、最終的に大人語としても定着したと考えられる。「グルグル、グルグル[guruguru.guruguru]」が実際の音を模したオノマトペに由来すると認識しつつ呼び寄せ語としても用い、オノマトペを短縮化して語末を長音化した語を「猫」の一般名詞として大人が用いる点、さらにこれが地理的な分布域を持ち共有されている点で興味深い。

なお、大人が一般的に用いる語であるものの、城久のグルー[guru:]には一種のユーモアが感じられる。喜界町城久の話者お二人は、名詞「猫」についてたずねたとき、目を輝かせて楽しそうに「グルー[guru:]」と発話し、喜界島では本当は[maja:]<sup>12</sup>と言うが城久では[guru:]と言うのだと説明しながら、[guru:]は[maja:]をオノマトペで言い換えることば遊びのようなユーモアを含む語であることを教えてくれた。大人語として用いられる場合にも語形の由来がオノマトペであると認識されているため、副次的なニュアンスを含むものと考えられる。

### 3. 4 動きのようす

動きの様子を表すオノマトペについては、中本(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」の「人間及び生物の擬態語」に次のようにあり、動作主体によるオノマトペの使い分けが示されている (p.14)。

「うろうろ」など、動作を表現する語。

人間は manja manja

tʃʔuŋa manja manja sui (人がうろうろしている)

牛・馬は matʃa matʃa

猫・犬は maja maja

maja:ŋa maja maja sui (猫がうろうろしている)

ʔiŋŋa: ŋa maja maja sui (犬がうろうろしている)

魚は mantʃa mantʃa

虫は ʔunja ʔunja

蛇は ʔunja ʔunja

<sup>12</sup> マヤー[maja:] (猫)はオノマトペのマヤマヤ[maja maja] (うろうろする)とは結びつかないようである。話者に尋ねたところ、特に思い当たらないとのことであった。

蠅は bu: bu:

上記の記述を参考に、人間、牛・馬、犬・猫、魚、虫、蠅が「うろうろするさま」を表すオノマトペに注目して調査を行った。城久では、人間・猫・犬・魚についてはマヤマヤ[majamaja]が用いられると回答された。

(22) アンチョー マヤマヤ[majamaja] スッチャヤ。(あの人、フラフラしている。)

(23) ウヌ インカ°ー マヤマヤ[majamaja] シテ アッチュイヤー。(うちの犬、うろうろして歩いている。)

(24) ウヌ グルー マヤマヤ[majamaja] シテ アッチュイヤー。(うちの猫、うろうろして歩いている。)

(25) アン イオ マヤマヤ[majamaja] スイ。(あの魚、ウロウロしている。)

人については(25)のようにトゥルトウル[turuturu]も回答された。ただし、うろうろしているというより、酔っ払ったときのようにふらふらしていて体が安定しない、という意味で用いられる。

(26) アンチョー トゥルトウル[turuturu] スッチャヤ。(あの人、フラフラしているよ。)

(26)については、岩倉(1941)に「トゥルトウル：うつらうつら—眠り陥ろうとし、または醒めようとするときの状態。」(p.178)、森豊良(1979)に「ツルツル シ：うつら、うつらした。じゅくすいしないこと。ねいったことがはっきりしない。」(p.196)とあるように、うたた寝をするときのようなすを表す。

他方言においても同様の意味を表す場合がある。小野正弘編(2007)には次のようにある(p.276。下線は竹田による)。

つるつる [方言] 浅く短く眠るさま。近畿地方・中国・九州地方。「つるっ」ともいう。

「いつの間にやらつるつると寝てしもうた」〈京都府〉 「つるつるっとしたら一番列車が通った」〈島根県〉 「つるっとした(一眠りした)」〈広島県〉

「九州地方」とあるのは大分県の方言集をさしており<sup>13</sup>、「ちょっとだけ眠る事。仮眠。」(月刊シティ情報おおいた・プラス編(1992);p.103),「仮眠をとること。=とろっとする。」(蒲江町教育委員会編(2000);p.78)がそれである。これらのことから、(25)のトゥルトウル[turuturu]は、仮眠を取る際に体が安定せず無意識にゆらゆら動くようすを表すオノマトペとして、中国地方・九州地方から連続的に分布しているのではないかと推測される。辞書や方言集の記述だけでははっきりしないため、大分県や島根県など他の地域での用法

<sup>13</sup> 小野正弘 編(2007)における方言項目は竹田晃子・三井はるみが執筆した。「つるっ」の項目

についてさらに詳しい情報が必要であろう。

虫については、「集まってうごめいているさま」を表すオノマトペとして、ツウジョウジョ[ʔuɕɕouɕɕo], ワジャワジャ[wadʒawadʒa]が回答された。本土方言においても同様の形式がほぼ同じ意味で使用されており、これも連続して分布しているとみられる。

(27) ムシガ ツウジョウジョ[ʔuɕɕouɕɕo] スンドー。(虫がウジャウジャするよ。＝虫がウジャウジャとうごめくよ。)

(28) ヘーガ ワジャワジャ[wadʒawadʒa] スイ。(蠅がウジャウジャする。＝ウジャウジャとうごめく。)

### 3. 5 副詞的用法のオノマトペ

オノマトペが最も抽象的な意味を持つのは、副詞として用いられる場合であると考えられる。音や声を表す場合は実体を語形でとらえたオノマトペともいえるが、副詞は速さや量を抽象化してとらえていると考えられる。

そこで、今回は、前述のリストにおいて「急いで」「たくさん」「ちょうど」を意味する語のうち、オノマトペに由来すると考えられるものに注目して調査を行った。

まず、「急いで」を表す語は、岩倉(1941)、森(1978)には次のようにある。

- ・ばたばた：さっさと一急いで。

例「バタバタ歩け」。

岩倉(1941)p.269

- ・ばた、ばた：いそがしそうにしていること。

「ばた、ばた、あつきょー」(急いで歩けよ。)

「ばた、ばた、せりょー」(手早くしなさいよ。)

森(1979)p.253

- ・ばた みちゅい：非常に急ぐー狼狽てるというに近い。バタクユイともいう。

例「あまりバタミチ(急ぎ狼狽てて)怪我するなよ」。 岩倉(1941)p.269

これらの例文を話者に提示しながら確認し、次のように使用するという回答を得た<sup>14</sup>。

(29) バタバタ[batabata] シリョー。(急いでやれよ。)

(30) バタバタ[batabata] シランバ。(急いでやりなさい。)

(31) バタバタ[batabata] シンナヨー。(急いでするなよ。)

(32) アンマリ バタミチ[batamitçi] ケガスンナヨ。(あまり急いでやってけがをするなよ。)

このバタバタ[batabata]は、せわしなく音を立てるようすを表すオノマトペでもあるが、

---

における「九州地方」の記述は、大分県のこれらの方言集を参考にしたものである。

<sup>14</sup> 奄美地方ではグルグルも使われるとの報告があるが(『奄美の方言さんぽⅡ』p.143, 『奄美方言分類辞典』p.205), 今回の調査では得られなかった。

そのようすが急いで何かをするようすを表すオノマトペとして用いられている。

次に、「たくさん」という意味ではガバ[gaba]が用いられる。ガバに似た表現に、ツマリ、ドゥンバイがある。ツマリは詰め込むように、ドゥンバイは「いっぱい」というような意味で用いられる。

(33) ガバ[gaba] カミヨー。(たくさん食べなさいよ。：子どもに)

(34) ツマリ カミヨー。(たくさん食べなさいよ。：子どもに)

(35) ドゥンバイ カミヨー。(いっぱい食べなさいよ。：子どもに。茶碗いっぱい・山盛りに食べなさい、というような意味)

速度についていう場合は、ドンドン[dondon]が用いられる。

(36) ドンドン[dondon] カミヨー。(早く食べなさいよ。：子どもに)

最後に、「ちょうど」「ぴったり」に相当する表現について、ガッチリ[gattɕiri]がある。

(35) ガッチリ[gattɕiri] イチジカン カータ。(ぴったり=ちょうど一時間かかった。)

岩倉(1941)によると、阿伝ではガットゥイが用いられ、「サーシローカ ガットゥイ」(どうしよう、ほんとに)のように後続副詞として文末に用いられるとある。しかし、城久の「ガッチリ」にはそのような用法は確認されなかった。喜界町において、これらの文法的機能には地域差があると考えられる。なお、このガッチリは九州南部のガッツイ・ガッチュイ・ガツツリなどと同系の語と思われる。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、喜界町方言におけるオノマトペについて、方言文献によるオノマトペ・リストを語形の種類と意味による分類という観点から分析し、喜界町城久方言における面接調査から、音・鳴き声、動き、副詞的意味を表す用法について報告した。要約するとおよそ次の通りである。

文献によるオノマトペ・リストの分析では、繰り返し語形が多いことや、動詞の構成要素としての生産性はあまり高くないこと、多義語がみられないこと、音・動きを表す語がやや多いことを確認した。また、音・動き・身体感覚など実質的なものには繰り返し語形、副詞的意味のように抽象的なものにはト・トゥを後接するものが多く、語形と意味との間にある程度の関連がみられることを述べた。面接調査においては、音・鳴き声、動きのようすを表すオノマトペ、副詞的に用いられるオノマトペについて調査を行った。音を表すオノマトペにおいては大きな音は有標で小さな音は無標であると考えられること、鳴き声などの音を表すオノマトペでは、繰り返し語形を短縮化し、語末音を長音にした名詞があることについて述べた。その他、動きの様子を表すオノマトペと、オノマトペに由来する副詞類について述べ、以上のオノマトペのいくつかが本土方言と連続的に分布している可能性について指摘した。

今後の課題として、次の2点があげられる。本稿では、オノマトペ・リストを作成したことによって喜界町方言のオノマトペを見わたすことが可能になったため、語彙としての特徴を全体的に概観することができた。また、面接調査の準備と分析の段階において、これらを援用することもできた。今後は、多くの方言におけるこのようなリストや、方言間の比較や分布を確認できるようなデータベースが必要である。また、面接調査においては、部分体系をえがくのに十分な質問を実施できなかった項目が多い。調査法を含め、いずれも今後の課題としたい。

### 参考文献

- 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論社(国書刊行会 1977 年復刻,全国方言資料集成)
- 恵原義盛(1987)『奄美の方言さんぽⅡ』海風社
- 長田須磨・須山名保子 編(1977・1980)『奄美方言分類辞典』上下巻, 笠間書院
- 小野正弘 編(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館
- 蒲江町教育委員会 編(2000)『かまえことのは解体新書—蒲江町の方言集』
- 月刊シティ情報おおいた・プラス 編(1992)『大分弁語録解説—現代大分弁の基礎知識』おおいたインフォメーションハウス
- 中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言 4—奄美喜界島志戸桶—』, 法政大学沖縄文化研究所
- 中本正智(1981)『図説 琉球語辞典』金鶏社
- 中本正智(1987)「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』9, 東京都立大学国語学研究室
- 森 豊良(1979)『喜界島の方言集』(自費出版)



## 付表 喜界町方言のオノマトペ・リスト

### 凡例

- (1) 文献列の「岩」は岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』, 「中」は中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」, 「森」は森豊良(1979)『喜界島の方言集』を表す。また, 「岩」「森」「中」に当該語形が掲載されている頁番号を付した。
- (2) 語形列・意味列の表記は, 原典に近いカタカナに改めた。無気音・鼻音・アクセントについては原典にあたってほしい。ただし, 中本正智(1978)の表記のうち,  $\eta$  行はカ行に<sup>o</sup>を付して表記し, 例文にはカタカナを添えた。
- (3) 併用される語形は／で区切って示した。
- (4) 意味列の例文には, 別の見出し語に掲載されていたものも加えた。その場合は, 例文の前に掲載頁番号を補った(したがって, 文献列の頁番号に相当しない場合がある)。
- (5) 分類列の略号は次の通り(分類の手順は本稿2節を参照)。

語形: A…繰り返し語形, B…イ・ラ・リが後接する語形, C…ト・トゥが後接する語形。なお, a は準繰り返し語形(例: アンビクンビ, ユラッサラなど), c はチが後接する語形で, それぞれ A・C に準ずる語形であることを意味する(本章の「2. 2 語形の種類」の語数には含まない)。オノマトペに由来しない語形はこれらが空欄である。

意味: 音…擬音語・擬声語, 動…動き, 体: 身体感覚, 心…心理, 速…速度, 量…量, 抽…抽象的意味を意味する。

- (6) 意味・用例欄の【 】には本稿筆者による注記を示す。
- (7) なお, このリストは次のような点において注意が必要である。これらは今後の課題でもある。このリストには, オノマトペの周辺的な語形も含まれる。日本語方言におけるオノマトペは, 一般に語基の繰り返しや特徴的な接辞が付くなどの形をとり, 実際の音を表す語や動き・感覚のようすを表す語が多い。このリストでは, それらを手がかりに, 語形・意味・例文を検討したうえで, 文献資料からオノマトペとして抽出した。語源をたどると厳密な意味での擬音語・擬態語ではない語が含まれる可能性がある。また, 語形・意味において関連する語形をも可能なかぎりもらさず抽出しようとしたため, 例えばサ(さあ)やズンバイ(いっぱい)のように感動詞・副詞やそれらとの区別が難しい語も含まれる。リストの総語数は168語, うち感動詞・副詞などのように周辺的な語は19語含まれる(表1の語形数から除外した)。

文献・頁番号	語形	分類			意味・用例	
		語形		意味		
森・p.020	アッサイ ト	A	B	C	抽	あっさりと。
岩・p.015	アドゥナアドゥナ	A			動	のろのろ—まごまご。p.015「アドゥナサイ(のろい、のろまである—じれったい程に。)」 p.015「アドゥナー:のろま。罵言して言う語。アドゥスイも言う。」
岩・p.023	アンビクンビ	a			量	物の溢れるほど一杯になっている形容。あふれこぼれの義。例「幾日も降り続いて、田の水はアンビクンビぢゃ」。
岩・p.037	イライラ	A				刃物等の鋭い形容、一鎌をイライラ研ぐ等。又元気の横溢している人にもイライラしている人等という。
森・p.053	ウガッ ト			C	心	うっかりしていて。迂闊にしている。
森・p.064	ウチャウチャ	A			動	落ち着きのないこと。ウチャ、ウチャ(浮き、浮き)。
中・p.14	ツウニヤツウニヤ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。虫、蛇。 ʔunja ʔunja p.037「カンヅムシカ° ツウニヤ ツウニヤ ウウンドー kandzumufi ŋa ʔunjaʔunja wun do : (蛆虫がうようよいるよ)」
岩・p.057	ウミッチ			c	抽	思い切って—「うんと」たくさんの意。「ウミッチ カディ ウミッチ ファタラキ(うんと、食って、うんと、働け。)」p.057「ウミッチュイ:意を決する。断念する。また精出す。「ウミッチ ヤラチ ミロー(意を決し、やって、みよう。)」 「カンケーイッカ シリバー ウミッカララン ドー(考え過ぎ、すれば、思い切れない、よ。)」 「ウミッチ ヌ タラン(精出し(はげみ)、が、足らん。)」
森・p.083	エーテ／エーイ		B		量	小雨がぼつぼつ降り始めること。p.026「アミガ、エーイ ダチ(雨がぼつぼつ降り出した。)」
森・p.090	ガジガジ	A			心	心の動揺でわくわくしているさま。
中・p.44	ガタガタ	A			動	「ガタガタカ° トウマティ gatagata ŋa tubatɬui(ふるえがとまる)」
岩・p.092	ガヂガヂ シュイ	A			音	感情などが激した時などに歯を噛むさまをいう。また寒さに震えるさまにもいう。p.092「ガヂミチュイ(武者震いする—相手に立向かうさま。また非常に好きな物や事に対して貪りつくさまにもいう。)」
森・p.082	ガッツイ		B		量	ちょうどよい。等しい(重量、形状、色彩など)。
岩・p.093	ガッツイ／ガットウイ		B		抽	きちきち—かつきり。阿伝では全くという後続副詞としても用いる。鹿児島ガッツイ。「ガットウイ イチヂカン カータ(かつきり、一時

					間、かかった。)」
岩・p.094	ガバ			抽	たくさん。「ニヤー ガバ デー(もう、たくさん、です。—もう結構です。すすめられた食物を辞退する語。)」「クリファー ス ガバ ナティ ウイ(蜜柑、が、たくさん、なって、いる。)」
森・p.094	ガバ			量	たくさん(つまみ参照)。「ガバ、カミヨ(沢山 たべなさいよ。うんとたべなさいよ。)」「ガバ、ナ(沢山か。)」「ガバナ、チュ(沢山の人。)」「ガバム、ネンムン(沢山もないのに。)」
森・p.095	カミヤカミヤ	A		速	何かやっているように見せかけてぼやぼやしているさま。
中・p.19	ガラガラ	A	B	音	「ハンメーカ° ガラガラ スン hamme : ŋa garagara sun(雷がごろごろする)」
中・p.38	キーキー	A		音	「キーキー グイ ki : ki : gui(つまったような高い声)」
森・p.103	グーグ	A		体	じゅくすいしている。
森・p.104	クシャクシャ	A		心	けちけち。だしおしみ。
森・p.104	グジュグジュ	A		音	ひそひそ。他人に聞こえないように小さな声でささやくこと。
岩・p.099	グヂュグヂュ	A		音	愚図愚図—動作の。ぶつぶつ—不平を言う様。ひそひそ—話をする様。
森・p.105	クスクス	A		音	風邪などで喉がごろごろしているさま。「クスチャー(ぜんそく(喘息)の人。)」
森・p.107	クツ ト			C 抽	ずっと。用例「クツト、ユカ、アンベー(ずっとよい調子、からだの調子のこと。)」「クツト、ウビク、ナタンドー(ずっとよくなったよ。)」「クツト、ユタシャイ(ずっとよくなった。)」
森・p.107	グツグツ	A		動	野菜などをみじん(微塵)切りにすること。
中・p.37	グラグラ	A	B	動	「ヤーカ° グラグラ ツインキユイ ja : ŋa garagara ?iŋkjui(家がぐらぐらうごく)」
森・p.111	クリクリ	A	B	動	上機嫌になって殊更に元気で立廻ること。
森・p.111	グルイ ト		B	C 速	とうとう。「グルイト タッチ」(とうとう、立ちあがった)。
森・p.111	グルサ			速	すばやい。すばしこい。
岩・p.101	グンナイ		B	心	がっかりする—ぐんなりする。p.101「グンナー:跛。グンナイグンナイ…跛者の歩行の様を形容していう。」
森・p.113	グンナイ		B	心	がっかり。うんざり。らくたん等。
森・p.114	ゲーゲ	A		音	嘔吐をするさま。
森・p.114	ケーケー	A		音	おくび(嘔)(胃にたまったガスが口の外に出ること)。
中・p.04	ゲーゲー	A		音	げっぷ。「ゲーゲー スン gē : gē : sun(げっぷをする)」
岩・p.102	ゴイー			音	豚。擬声語。

岩・p.092	コーコー	A			音	水や汁などをガブガブと呑む形容。標準語のガブガブに似ている。
森・p.118	ゴン ヒナイ				量	量が大分減ること。
森・p.118	ゴンゴツ	a			速	早く。すぐ。いそいで。「ゴンゴツ、イジクー、ヨー(急いで行ってこいよ。道草しないで早く帰れよ。)」 「ゴンゴツ、カミヨー(急いで、たべなさいよ。)」 「ゴンゴツ、タテ(急いでたて。)」
森・p.118	ゴンゴン	A			量	規格の大きすぎること。(ダブダブ参照)。
岩・p.104	サ				抽	接頭語。実に嫌だという感情を表す語。「サヂェー ネーン(さっぱり面白くないー嫌だという感情が強く含まれている。ヂェー参照。)」 「サ ファゴーカ(嫌悪の情を表した語で、「サファゴーカ ワロー チャ」といえば、実に嫌らしい野郎だという意になる。)」 【ヂェーは立項されていないが、p.062 ウワイの項に例文「ヂェー ヤ ウワイ(面白いこと限りもないーこの上もない。)」がある】
森・p.120	サーサ	A			音	水の流れる音の形容。
森・p.120	ザーザ	A			音	土砂降りの雨音の形容。
中・p.44	ザーザー	A			音	「スイドー ミヅカ° ザーザー トゥブチュイ suido : mīdzu ŋa dʒa : dʒa : tubatʃui (水道の水がザーザーふきでている)」
森・p.120	サーザー ト	a		C	量	きれいさっぱり。
森・p.181	サッサ	A			心	気はせかせかして。
森・p.123	サッパイ ト		B	C	抽	さっぱりと。
中・p.18	サブリ				音	夕立、にわか雨。時々、サーッと降る雨。 dʒabui 【オノマトペ「ザ」+「降り」か?】
森・p.125	サラサラ	A			動	ぶるぶるふるえる。
森・p.125	サラミチ			c	動	こうふんしてがたがたふるえているさま。
森・p.125	サリッ チ		B	c	音	天気の良い日に馬耕した畑の土がよく碎けてふわふわしているさま。
森・p.125	サリテ				音	天気のよい日に中耕した畑の土の状態。
森・p.125	サリテ				音	油や汗をきれいに洗いおとした頭髮に指が触れた時の感触。
森・p.126	サンジャリ		B		音	さんざん。こっぱみじん。あとかたもなく。「サンジャリ、ワリ(さんざんにわれた。)」
岩・p.112	サンバンチリ	a			音	ちりちりばらばら。
岩・p.117	シッカイ ト		B	C	抽	しっかりと。
森・p.133	シツタイー		B		量	ぬれ(濡れ)ているもの。「シツタイ、ニヌー(ぬれた着物。にぬーはちぬーで(着物。))」「シツタイ、ハツタイ(ぬれてじくじくしているさま。じくじく。(水分を多量に含んでいるさま。))」
森・p.133	シツタテ				量	ぬれて。
森・p.133	シツタトイ				量	ぬれている。

森・p.149	ジルジル	A			動	じろじろ。無遠慮に見つめるさま。
森・p.150	ジワジワ	A			速	ゆっくり、ゆっくり。そろそろ。
森・p.156	スツサギスツサギ	A			音	めそめそ泣くさま。
森・p.156	スツタイ		B		量	すっかり。「スツタイ、ダリツキテ(すっかりつかれきった。)」
森・p.156	スツパイ		B		量	みんな。のこらず。あるだけ。(ヒンニャ参照)。
森・p.156	ズップイ		B		量	ずぶぬれ。びしょぬれ。「ヌリリバ、ズップイヌリ(やりかけた事は途中で、へこたれるなどという戒めの言葉。ヌリリバ(ぬれるなら)ズップイヌリ(びしょぬれになる程))」
森・p.158	スハツ ト			C	量	みんな。すっかり。
中・p.37	ズラズラ	A	B		動	「ズラズラ トゥーユン dzurudzuru tu : jun (ぞろぞろ通る)」
森・p.160	ズンバイ				量	たくさん。一杯。(ガバ参照)。(ツマイ参照)。
森・p.162	セカセカ	A			心	心がいらだって落ち着かない(未知なものに対する興味。好奇心等)。「セカサッテ(せかされて。せきたてられて。)」「セカチ(せかして。)」「セセカワ、サッテ(せきたてられて。)」「セセカワセ(いそがせ。)」「セセカワソー(いそがそう。)」「セセカワチ(いそがして。)」「セセカワチュン(いそがして。いそがしている。せきたてている。)」
岩・p.137	ソー／ショー				抽	恰も一そっくり。ガッツイ参照。「ソー ニチウイ(小野)(全く、似て、いる。)」
森・p.164	ソーソ	A			音	液体などが流れ出るさまの形容詞。
中・p.37	ソヨソヨ	A			音	「ハジカ° ソヨソヨ トゥーユン hadzi ŋa sojosojo tu : jun (風がそよぐ)」
森・p.167	ターリターリ	A	B		音	のど(喉)に何かつまっているような病人の息づかい。
森・p.169	タチョタチョ	A			心	そわそわしておちつかない。
森・p.169	タッカー				音	水面にへいこうになるように石を投げると落ちてからはねあがるさま。
岩・p.183	ヂヂ／ヂキ	A			抽	恰度一まるで。「ヂヂ ウヤ ニ ニチュイ(全く、親、に、似てる。)」
森・p.179	チッカイメッカイ		B		動	だんだん相手の方ににじりよってくること。
森・p.187	チョコマカ				動	手品。大正のはじめ頃本土から渡来、湾、赤連などの県道でやっていた。「チョコ、マカ、セー(手品師。箸三本のうちの一本にしるしをしてあるのを片手に握って、もう一度皆の前でたしかめ、「コレジャガ、コレジャガ、コレジャガヨ、ハイトチョコマカ、ドッコイショ」と目にもとまらぬ早や技。これぞと思う一本を抜くがなかなか当たらない。)」

岩・p.187	ヂルヂル	A		動	じろじろ。一目を動かし、またはぎょろぎょろ凝視する形容。「ミーヂルー(目のぎょろぎょろしている人。)」
岩・p.170	チンチン	A		抽	追々ーだんだん。「風が西北へ廻ったから、チンチン海も風渡るだろう」
森・p.191	ツゾーリ		B	抽	混乱。ごたごた。「ツゾーリトヌ、ヤウチ(ごたごたしている家庭。やうち(家庭)。)」
森・p.192	ツツチャツツチャ	A		速	まごまご。何か用件がありそうな態度をすること。
森・p.194	ツマイ		B	量	たくさん。一杯。(ズンバイ参照)。(ガバ参照)。「ツマイ、カミヨー(たくさんたべなさいよ。腹いっぱいたべなさいよ。)」「ツマイ、チランバ、ヒーサン、ドー(たくさん、着けないと寒いよ。)」「ツマイ、デー(もうたくさんです。腹いっぱいです。)」「ツマイ、ヌミ、ヨー(たくさん、のみなさいよ。)」「ツマイ、ブテ、トキヨー(うんと叱っておきなさいよ。)」
森・p.196	ツルツル シ	A		動	うつら、うつらした。じゅくすいしないこと。ねいったことがはっきりしない。
森・p.197	ツン スシー			抽	まっすぐしてまがらないこと。
森・p.197	ツン ト			C 抽	どんなときでも。どんな事があっても。(つきあいしない。家に出入りしない)。「ツント、シャ、イリラー(どんなときでも、出入りしない。シャ(足)。)」
森・p.197	ツンツン	A		心	ぶりぶり。ぷりぷり。
岩・p.188	ディーディー トウ	A		C 量	たっぷりと。【p.188「ディー：嵩。「三月植の唐芋はディー・ネーラン(実入が悪い)」「外来米は炊くとディーはあるが、食べると不味い」】
森・p.202	テヤテヤ	A		速	いそ、いそ。喜びいさむさま。
岩・p.192	ドゥップイ／ゾップイ		B	量	づぶづぶまたはびしょびしょに相当する副詞で、濡れるを形容する。「ドゥップイ ヌリタ(ずぶずぶに濡れた。)」
岩・p.192	ドゥブ			量	ドゥップイ、ゾップイ(小野)の名詞化した語で、びしょ濡れまたはずぶ濡れに相当する。例「汗で着物がドゥブ(に)なった」。
岩・p.176	トウム／トウムイ		B	抽	きっちりーかっちり。「トウム イッシュー(かっきり、一升。)」
岩・p.192	ドウムドウム	A		音	どしんどしんーづしんづしん。足音の強く響く形容。
岩・p.178	トウルトウル	A		動	うつらうつらー眠り陥ろうとし、または醒めようとするときの状態。
岩・p.192	ドウルドウル	A		体	どろどろー泥などの形状。p.192「ドウル：泥。」

岩・p.193	ドゥンバイ／ドンバイ				量	一杯一入れ物に十分に充ちていること。ヌーミに同じ。「ハミ ニ ドンバイ ミドウ イリトゥキ(甕、に、一杯、水(を)、入れとけ。)」
森・p.327	ドキドキ	A			音	胸がドキドキして。
森・p.213	ドブ				量	びしょぬれ。ずぶぬれ。「ドブツキテ(びしょぬれになって。)」
森・p.213	トボー				動	ぼおとした顔つき。
森・p.215	ドン				音	思いものが落下してたてる音の形容。
森・p.215	ドン				音	太鼓の音などの形容。
森・p.216	ドンドン	A			速	どしどし。さっさと。いそいで。
森・p.223	ナドナド	A			体	表面がすべすべしていること。なめらか。「ナド、ナド、フネガ、ハユイ(静かな海面を船がいく。ハユイ(航行。))」
岩・p.207	ナンブナンブ	A			体	すべすべ。p.206「ナンブサイ: 迂りっこい」、p.207「ナンブチュイ、ナンブミチュイ: すべる。」【「撫でる」に由来するか?】
岩・p.208	ニヤー				抽	もう。もう良い、もういけない等の場合。
岩・p.208	ニヤービ／ニヤーナイ				抽	もう少し—もっと。「ニヤービ、ニヤーナイ(もう少し—もっと。)」「ニヤービ ユラリティ ウモーリ(もっと、ごゆっくりして、おいでなさい。)」
岩・p.208	ニヤマチバニヤマ	a			抽	ほんの今先。今と言えば今の意。
岩・p.208	ニャンマ				速	今に—やがて。例「燕が飛び回るが、ニャンマ雨が降るだろう」。
岩・p.208	ニューウイ／ニューワイ			B	体	呻吟する。ニューニュー・シュイともいう。
岩・p.208	ニューニュー	A			体	呻吟。例「腹が痛いといってニューニューしている。」
岩・p.209	ネイーネイー (ト)	A		C	音	副詞。冴え冴えと—三味線や歌の音の形容。「ネイー イヂユイ(話が「はずむ」。また三味線や歌の音が冴える。イヂユイは出る。)」【音(ね)に由来するか?】
岩・p.240	パシ トウ			C	抽	副詞。力を強くというような場合に用いる。「パシトウ ウスッキリ (うんと、押し付けよ。)」
岩・p.269	バタバタ	A			速	さっさと—急いで。例「バタバタ歩け」。「バタミチュイ: 非常に急ぐ—狼狽する—toに近い。例「あまりバタミチ(急ぎ狼狽して)怪我するなよ」。
森・p.254	パチパチ	A			音	火が燃えることの形容。(火が燃えるときにはパチパチと破裂音がするから)。
森・p.254	パチパチ	A			心	仲が悪い同士の形容。(おだやかさがなくにらみあっているから)又イシトマーイ(石と茶わん)とも言う。
森・p.256	ハッチラハッチラ	A	B		体	はちきれの程充実しているさまの形容。(よく肥っている人、充実している穀物の粒などに形容する)



森・p.263	バラ (マチ)		B		動	ばらまき(散播き)(筋まきの反対)
岩・p.266	パラー		B		音	紙鉄砲。但しウムッシーという木の実を用いる。パラーはその音から来た名称か。
森・p.263	ハラハラ	A	B		心	気づかいあやぶむさま。
岩・p.270	バンバラー	a	B		音	まばらーばらばら。例「空豆は肥料にするのだから、バンバラー蒔してもよい」。
岩・p.267	ピーピー	A			音	ピーピー音を鳴らせる玩具。また木の葉や阿旦の葉で造ってピーピー鳴らせる草笛。
森・p.268	ヒーラヒーラ	A	B		体	「ヒーリ、ヒーリ」に同じことば。
森・p.268	ヒーリヒーリ	A	B		体	ひり、ひり、軽い痛み。
岩・p.271	ビッタイ		B		体	べったり、物がべたべたに付いている形容。柔らかい形容。「アーニー ヌ ビッタイ カティ ウイ(蟻、が、べたべたに、付いて、いる。)」 「シミリチ ビッタイ ナトウイ(湿って、柔らかく、なってる(黒砂糖などの場合。))」
森・p.274	ビラー サ		B		体	やわく。
森・p.274	ビラビラ	A	B		体	やわいこと。やわやわ。
中・p.14	ブーブー	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。蠅。ブーブー bu : bu :
岩・p.272	ブカブカ	A			体	副詞。ふはふはと軽い触感。一ふとんや土など。p.272「ブカ:脆く軟い。」「プカー(阿伝・児)(相撲の弱い者。))」
中・p.37	プッチャー				動	「ミマニユカ° プッチャー スン mīmanju ŋa puttʃa : sun(眉がびくびくうごく)」, 「ピサティ プッチャー スン pi : sati puttʃa : sun(寒くて体がふるえる) ガタガタ スン gatagata sun(ガタガタする)ともいう。」「ユミタカ° プッチャー スン jumitaŋa puttʃa : sun(声がふるえる)」
森・p.282	ブッテカチ			c	抽	にわかに、急に、とつぜん。
岩・p.261	フトゥフトゥ	A			動	ぶるぶる一震える形容。「プトゥンニユイ(震える。プンニユイに同じ。))」「プンニユイ(震える。プトゥンニユイに同じ。))」
森・p.284	フトフト	A			動	からだがふる(震る)えること。
森・p.287	フヤフヤ	A			体	やわらかで軽やかな感触をいう。
森・p.287	フヤフヤ	A			動	なづいている犬が尾をふりふりすること。
岩・p.274	ブラ		B		動	ずぼら。
森・p.288	ブラブラ	A	B		動	することがなくぶらつくさま。「ブラ、ムン(することがなく遊びくらす人。))」
中・p.41	ブラブラ	A	B		動	「マチバ ブラブラ ヲアツチュイ matʃi burabura ʔattʃui(街をぶらぶら歩く)」
森・p.290	ブルブル	A			動	ぶるぶる、ふる(震る)えること。
岩・p.274	ブン トゥ			C	抽	さっぱり。「ブントゥ チェー ネーン(さっぱり、面白み(が)、ない。))」
岩・p.275	ベー				音	山羊。擬声語。

岩・p.277	マードゥイマードゥイ	A	B		動	うろうろ。「マードゥイ・マードゥー ヌー ドゥ シ アッチェル(うろうろ、無い、を、ぞ、して、歩きをる?)」【「惑い(まどい)」の繰り返し語形か?】
岩・p.277	マーマー トゥ	A		C	抽	まんまと。「マーマー・トゥ ダマサッタ(まんまと、だまされた。)」
中・p.14	マチャマチャ	A			動	「うろうろ」など、動作を表現する語。牛, 馬。マチャマチャ matʃamatʃa
森・p.305	マニヤマニヤ	A			動	まごまご。
中・p.14	マニヤマニヤ	A			動	「うろうろ」など、動作を表現する語。「トゥンカ° マニヤマニヤ スイ[tʃʔuŋa manjamanja sui](人がうろうろしている)」
森・p.506	マヤマヤ	A			動	うろうろ、ぶらぶら。
中・p.14	マヤマヤ	A			動	「うろうろ」など、動作を表現する語。猫, 犬。「マヤーカ° マヤマヤ スイ maja : ŋa maja maja sui(猫がうろうろしている)」「ツインカ° マヤマヤ スイ ʔiŋŋa : ŋa maja maja sui (犬がうろうろしている)」, p.041「トゥンヌ ヤー ヌ メー マヤマヤ スイ tunu ja : nu mē : majamaja sui(鳥小屋の前をうろうろする)」
中・p.14	マンチャマンチャ	A			動	「うろうろ」など、動作を表現する語。魚。mantʃamantʃa
森・p.322	ムシャムシャ	A			動	物をおいしそうにたべるさま。
森・p.322	ムジャムジャ	A			速	ゆっくり、ゆっくり。のろのろ。(ムニヤ、ムニヤ参照)
森・p.323	ムチャーリムチャーリ	A	B		音	(調和の悪いこと。音調に合わない音痴の唄声等の例え。はなればなれ)
森・p.323	ムチャムチャ	A			体	ねばねば。ねとねと。べとべと。「ムチサ(ねばり(粘り)けがあること。)', 「ムチツカイ(ねばりつく。)', 「ムチツカテ(ねばりついて。)」
中・p.39	ムチャムチャ	A			体	「ムッチーカ° ムチャムチャ ツツキュン muttʃi : ŋa mutʃamutʃa tsʔukjun(餅が手にくっつく)」
森・p.325	ムドムド	A			速	早く。さっさと。「ムド、ムド、セリヨー(手早くしなさいよ。)」
森・p.326	ムニヤムニヤ	A			速	のそのそ。のろのろ。
森・p.328	ムル				抽	語尾に続くことばで色々と意味がちがう。まったく。まるで。ほんとに等と解せらる。「ムル、カマラー(まったく食べられない。)', 「ムル、マリ、マーリ(ほんとに久し振り。)', 「ムルタ、ギーナ(そっくり。その儘。ぜんぶ。)」
岩・p.309	ヤタ				抽	もし。若しかーひよつとすると。例「ヤタ雨が降るかもしれないから、干し物を入れて出よう」。
森・p.340	ヤツ ト			C	速	ようやく(漸く)。ようよう。

森・p.355	ユフユフ	A			体	やわいこと。(囁れると弾力があって軟く感ずること)
岩・p.322	ユデーユデー	A			動	のろのろ。p.322「ユデーサイ:のろい—活動が。ドゥンナサイともいう。」
岩・p.323	ユラッサラ	a	B		動	ゆらりゆらり—踉蹌として歩く様。「病み上がりでユラッサラして歩くこともならん」、「酒を飲んでユラッサラして歩いている」。
森・p.357	ユラユラ	A	B		動	ふらふら。足もとがしっかりしないさま。
岩・p.324	ユラリユイ	a	B		動	ゆっくりする、滞在する。「ユラリティ ウモーリ(御ゆっくりして、お出でなさい。)」
岩・p.324	ユルイ ト		B	C	速	ゆっくりと、—通常客の対応に用いる語。「ユルイトウ ウモーリ(どうぞお構いなく。)」 「ユルイトウ ナインソーリ(おくつろぎなさい—気楽におなりなさい。)」
岩・p.327・326	ヨイヨイ／ヨーリヨーリ	A	B		速	ゆっくりゆっくり。「ヨイヨイ アッキ(ゆるゆる、歩け。)」 「ヨイヨイ カチャー アミ デーラ(近々、へは、雨、でしょう。あまり急でなく、そのうちに降るでしょうという程の意。)」
森・p.359	ヨイヨーイ	A	B		速	ゆっくり、そっと、そろそろ。
森・p.359	ヨーイ		B		抽	そっと、手やわからかに、ゆっくり。「ヨーイ ネインバチュキ(そっと、寝かせておけ。)」 「ヨーイ ムティ(そっと、持て。)」 「ヨーイ、ヨーリ(上嘉)(静かに、そっと。)」
岩・p.326	ヨーガリヨーガリ	A	B		体	ひよろひよろよろよろ。人にも物にもいう。「ヨーガリー(痩せてひよろひよろしている者。)」
森・p.360	ヨーリ		B		速	ゆっくり。そっと。手やわからか。(よーいと同意語)
岩・p.334	エービ／エーエ	A			音	わいわい喧噪する様。わいわいにはエーエという。

※本研究は文部科学省科学研究費補助金・基盤(C)「日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究(課題番号 22520484)」(2010-2011(平成 22-23)年, 研究代表者: 竹田晃子, 研究分担者: 三井はるみ・小林隆)の成果の一部である。